

## 巻頭言

山田 哲子

Covid-19が存在する世界になって、早2年が経った。この2年の間に、例えば「Noコロナ」や「Withコロナ」、「ワクチン接種派」や「慎重派」、「未接種派」、感染者増加により医療がひっ迫する事態をより懸念する人と外出の自粛や休業要請などによる経済の停滞をより懸念する人といったように、個人が何に重きを置いているかの違いが人々の間で浮き彫りになったようにも思う。新種のウイルスという科学の話をもってしても、人々の捉える現実が多様であることが興味深い。しかし同時に、テレビ番組ではコメンテーターが今後必要とされる対策について意見を述べると、異なる意見を持つ別のコメンテーターがその意見を切り捨てたり、インターネットのニュースサイトでは記事のコメント内で読者同士が争ったり、個人が思想や思考の発信を容易にするソーシャルネットワークサービスの場においては、専門家が素人からの批判意見を論破したり「話にならない」とブロックしたりする様子を不特定多数のユーザーが賞賛する……といった場面も多く観察されるようになったようにも思う。まるで、未曾有の事態を契機に人々が分断され、異なる価値観を持つ者同士は分かり合えないというような現実を見せつけられているような気分になった。かく言う私も、自身の価値観に基づいてこの前代未聞の事態に行動しているので、「自分の意見とは違う」と他者を認識する機会が増えている。

客観的かつ唯一無二の真実は存在せず、私たちが現実だと思うものは人々の言葉によって構成されたものだと考える社会構成主義の考えは、対立にどのようにアプローチするのだろうか。この立場からすれば、自分の主義主張に合わないものを蹴散らすことは「唯一無二の真実」が動いていることで、間違った行為であるという。社会構成主義では、対立についてどちらが正しい、間違っているかを決めるのではなく、「これらの相反する領域を接近させるにはどうしたらよいか？」という視点でアプローチする。この考え方は、「問題は、問題と認識されることによって問題となる」という社会構成主義の有名な考えを思い浮かべると理解が容易になる。ボストン地方のファミリーセラピストのグループによって考案されたパブリック・カンパセーション・プロジェクトという興味深いものを目にした。これは、ある事柄について敵対関係にある者同士（例：中絶反対派と容認派など）の対立をなくすための新しい話し合いの方法である。まず、敵対関係にある者同士が食事を共にする場を作り、そこでは問題となる事柄について話題にすることは禁止される。すると、互いに関心のある話題（例：仕事や子どもの話）と共に食事を楽しむことになる。その後が始まる当該の事柄のディスカッションでは、一般的に行われるような主義主張のぶつかり合いではなく、自身の経験に基づく個人的な話をするように求められる。主義主張の話は批難が批難を呼ぶが、他者の経験に基づく話には、参加者たちは批難をせずに耳を傾けるという。そして、どちらが正しいかの議論ではなく、そもそも問題となるような事態を回避するために互いの立場から協力できることは何かといった創造的な対話が展開することもあるという。これは、主義主張を通して他者を見るのではなく、相手の個人的背景を含めて理解することによって、自分と他者との間の共通性が認識され、溝が溝でなくなるということだろう。主義主張の異なる者は切り捨てて、物事を自己責任論に集約するような論調が蔓延している現代の世の中において、この社会構成主義の試みこそ必要とされているように感じている。